

同志社女子大学生活科学 Vol. 45, 29～36 (2011)

《原著論文》

瘦身願望と社会的比較 (I)

——瘦身理想像内在化の仲介効果——

Drive for Thinness and Social Comparison (I) :
Moderating Effects of Thin-Ideal Internalization

守 安 可 奈 諸 井 克 英* 前 原 澄**
(Kana MORIYASU) (Katsuhide MOROI) (Sumi MAEHARA)

松 谷 歩 美** 小切間 美 保*
(Ayumi MATSUTANI) (Miho KOGIRIMA)

Abstract : The present study examined the relationships among drive for thinness, comparisons with thinness models depicted in media, comparisons with same-sex peers, and thin-ideal internalization. Various scales were administered to female adolescents ($N = 247$). To examine the relationship patterns among various scale scores, the structural equation model analyses (*Amos 7.0*) were executed. The good solution was found. Drive for thinness among female adolescents was influenced by comparisons with same-sex peers more than thinness model in media. The relationship was mediated by thin-ideal internalization. The significance of this research was discussed from the point of view of social comparison theory (Festinger, 1954).

Key words : thinness, thin-ideal internalization, social comparison, female adolescents

I. 問 題

Thompson, Heinberg, Altabe, & Tantleff-Dunn (1999) は、美に関する社会的基準の重要性を説く社会文化理論に基づき、米国社会では瘦身が美と同義語になっていることを指摘した。つまり、女性の瘦身性に価値がおかれる社会や文化の下では、様々な仕方で瘦身圧力に曝されることになる。たとえば、諸井・小切間 (2008) は、女子大学生を対象として、①瘦身体型やダイエットに関する雑誌記事の日常的影響や、②メディアに登場する瘦身

モデルの理想化が瘦身願望を高めることを示した。本研究では、社会的比較の観点から瘦身圧力のメカニズムを明らかにする。

Festinger (1954) は、次のことを骨格とする社会的比較理論を提起した。①人は自分の意見や能力を評価しようとする欲求をもつ、②比較のための客観的基準がない場合には、他者との社会的比較が必要となる、③社会的比較は、類似した他者を対象として行われる。つまり、他者との比較は、自分の中の不確かさを明確にするという働きをもつ。なお、Gibbons & Buunk (1999) は、社会的比較における個人差を測定するための測度、Iowa-Netherlands 比較志向性測度を開発した。11 項目から成るこの尺度に関する因子分析によって、能力比較因子と意見比較因子が抽出された。しかし、Gibbons & Buunk

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生活科学部

**同志社女子大学生活科学部 2010 年度卒業生

は、①単一因子構造が十分にデータに適合する、②抽出された2因子間の相関がかなり高い、③能力比較や意見比較は自己理解促進のための他者からの情報収集である、という点から、11項目を単一次元尺度として扱うことを推奨した。

この社会的比較理論に基づくと、諸井・小切間(2008)による研究はメディアにより呈示される瘦身イメージ(あるいは実モデル)との比較を扱ったといえる。また、雑誌などのメディア媒体に呈示された瘦身モデルの影響に関しては多くの研究が行われており、Groesz, Levine, & Murnen (2001)はメタ分析を試みている。瘦身モデルの影響は、Thompson & Stice (2001)によれば、「瘦身モデルの内在化」によって引き起こされる。つまり、魅力に関する社会的基準として瘦身性の心理的取り込みが重要なのである。

Stice, Ziemba, Margolis, & Flick (1996)は、理想的身体ステレオタイプを内在化している程度を測定するために、10項目から成る理想身体内在化尺度(Ideal Body Internalization Scale)を開発した。Sticeらは、女子高校生・大学生を対象とした調査で、精神疾患診断基準(DSM-III-R)によって判定された神経性大食症者が健常者に比べて高い理想像を内在化させていることを見出した。

本研究では、諸井・小切間(2008)での知見を発展させる。瘦身に関する社会的圧力は、メディアだけでなく、日常の対人関係の中でも生じるはずである。例えば、Thompson, Heinberg, & Tantleff (1991)は、社会的場面で、自分の外見を他者と比較する傾向の個人差を測定する5項目尺度を作成した。この測度は、身体イメージ不満足や摂食障害と強く関連があった。つまり、種々のメディアに登場するモデルとの比較だけでなく、日常生活で接触する同輩との外見比較も瘦身願望の喚起にとって重要と思われる。

Thompson *et al.* (1991)の外見比較は、もともとFestinger (1954)が提起した社会的比較を外見に特定化したものである。したがって、日常的に他者比較を営む傾向が強ければ、外見比較も活発に行われると予測される。

仮説Ⅰ：社会的比較志向性は、他者との外見比較を促進する。

先述した諸井・小切間(2008)の研究では、メディアにより呈示される瘦身イメージの瘦身願望に対する影響が見出された。しかしながら、Festinger (1954)によれば、社会的比較は類似した他者を対象として行われる。これに基づくと、雑誌やテレビなどの様々なメディアに

登場する瘦身モデルよりも、実際に日常生活で接触する同輩との外見比較のほうが重要なはずである。

仮説Ⅱ：雑誌やテレビなどで目にする「女性モデル」との体型比較よりも、回答者が通学している大学の「女子学生」との体型比較のほうが回答者の瘦身願望に強い影響をおよぼす。

最後に、瘦身モデルの内在化(Thompson & Stice, 2001)の役割について述べよう。次の2通りの影響関係が考えられる。1つめは、外見比較を活発に行うほど、瘦身性に価値をおく社会や文化に曝されることになり、瘦身モデルは内在化されると予測できる。この場合、先述したように外見比較は当該人物が抱く一般的な社会的比較志向性により促進される。2つめは、逆に瘦身モデルが内在化されているほど、その内在化された理想像を確認するために外見比較を活発に行うと予測される。しかし、2つめの場合には、個人的傾性としての社会的志向性の位置づけが曖昧となる。そこで、本研究では、1つめの影響関係に基づき、外見比較と瘦身願望との間に瘦身理想像の内在化による仲介的役割を仮定した。

仮説Ⅲ：瘦身理想像の内在化は、瘦身願望に対する外見比較の影響への仲介的役割をはたす。

これら3つの仮説を検討するために、女子大学生を対象として質問紙調査を実施した。

Ⅱ. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2010年6月14日)。回答時には匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、後述する尺度にそれぞれ完全回答した女子学生247名を分析対象とした。回答者の平均年齢は18.54歳($SD = .81$, 18~22歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①社会的比較志向性尺度、②瘦身理想像内在化尺度、③同輩との比較尺度、④モデルとの比較尺度、⑤瘦身願望尺度、から構成されている。その他、回答者の体格に関する設問も設けたが、本報告では省略する(諸井・小切間・前原・松谷・守安, 2011 参照)。

(1) 社会的比較志向性尺度

日ごろ回答者が自分とまわりの人をどの程度比較する

かを測定するために、Gibbons & Buunk (1999) が作成した Iowa-Netherlands 比較志向性尺度を利用した。Gibbons & Buunk は、能力や意見の比較における個人差を査定する 19 項目を作成し、14 歳・18 歳の男女〈オランダ 599 名、米国 2460 名〉に実施した。項目分析によって 8 項目除外された。残りの 11 項目が Iowa-Netherlands 比較志向性尺度とされた ($\alpha = .83$, 再検査信頼性 $r = .60 \sim .72$)。本研究では、これらの項目をできるだけ平易になるように和訳した。

6 ヶ月間の回答者の生活を思い浮かべさせ、それぞれの文章で述べられている事柄があなたの行動や気持ちにあてはまる程度を 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」, 「3. どちらかといえばあてはまる」, 「2. どちらかというにあてはまらない」, 「1. ほとんどあてはまらない」)。

(2) 瘦身理想像内在化尺度

回答者が日常的に抱えている瘦身理想像を測定するために、Stice *et al.* (1996) による理想身体内在化尺度項目を利用した。Stice *et al.* は女子高校生で $\alpha = .88$ の信頼性を得た。ここでは、Stice *et al.* による 10 項目を意訳した。

回答者に 6 ヶ月間の生活を振り返らせ、10 項目それぞれが身体に関する回答者自身の気持ちにあてはまるかを 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

(3) 同性同輩／女性モデルとの比較尺度

本研究では、回答者が①同性同輩および②女性モデルと日ごろ体型比較を行っている程度を測定した。このために、Thompson *et al.* (1991) が作成した外見比較尺度項目 (女性回答者: $\alpha = .78$, 再検査信頼性 $r = .72$) を修正して利用した。①については回答者が通学している大学の「女子学生」、②については雑誌やテレビなどで目にする「女性モデル」と設定し、それぞれの比較対象に関する項目を作成した。

ここ 6 ヶ月間を思い浮かべさせ、まず①か②に関する 5 項目に、次に残りの比較対象に関する 5 項目に回答させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

(4) 瘦身願望尺度

回答者によって抱かれている瘦身願望の程度を測定するために、馬場・菅原 (2000) の瘦身願望尺度を利用した。この 6 ヶ月間の回答者の状態を思い浮かべさせ、自分の体型や「痩せる」ことについてどのように考えがちであったかを思い出させた。11 項目それぞれに対して

回答者自身の考えや態度にあてはまる程度を 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお、評定順の効果を相殺するために、社会的比較志向性尺度、瘦身理想像内在化尺度、および瘦身願望尺度では、項目順の異なる 2 種類の評定用紙を用いた。また、同性同輩／女性モデルとの比較尺度では比較対象の順を変えた。

III. 結 果

各尺度の検討

すべての尺度について、以下の手続きで単一次元性の検討を行った上で、尺度得点を算出した。まず、尺度項目に関して項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックを行い、不適切な項目を除去した。ただし、瘦身理想像内在化得点では多くの項目の平均値が高かったため、この基準は設けなかった (ただし、全項目 $SD > .40$)。その上で、次の 2 通りの仕方で各尺度の単一次元性を検討した。①主成分分析における第 1 主成分の未回転主成分負荷量 ($> |.40|$) と説明率、②当該項目得点と当該項目を除く合計得点のピアソン相関値と Cronbach の α 係数。尺度項目の合計得点を項目数で割った値をそれぞれの尺度得点とした。なお、瘦身願望尺度の 1 項目のみが項目水準の分析で不適切な結果を見せた。

(1) 社会的比較志向性尺度

全項目を対象とした主成分分析で 2 項目の未回転負荷量が低かったため、残り 9 項目について分析を行った。Table 1-a に示すように、良好な結果が得られた。

(2) 瘦身理想像内在化尺度

9 項目での分析で 1 項目の未回転負荷量が基準を満たさなかった。残り 8 項目は適切な結果を示した。これを Table 1-b に表す。

(3) 同性同輩／女性モデルとの比較尺度

同性同輩と女性モデルそれぞれで分析を行った。Table 1-c に示すように、5 項目で適切な結果が得られた。

(4) 瘦身願望尺度

項目水準で不適切であった 1 項目を除く残り 10 項目での分析結果は良好であった。これを Table 1-d に表す。

(5) 各尺度得点の検討

各尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。得点分布の正規性の検討を行ったところ、社会的比較志向

Table 1-a 社会的比較志向性尺度の検討―主成分分析と信頼性分析の結果―

		主成分負荷量(a)	相関分析(b)
sc_a_3	私は、他の人のやり方と比べながら自分のやり方に多くの注意をいつも払っている。	.48	.36
sc_a_4	私は、今までの自分の生き方を他の人の生き方と比較して考えることはほとんどない。*	-.56	.43
sc_a_5	私は、あることがどれくらいうまくできたかを知りたいときには、自分が行ったことと他の人が行ったことを比較する。	.62	.48
sc_b_1	私は、自分と同じような問題に直面している人が考えることを知りたくなることがよくある。	.66	.53
sc_b_2	私は、私がどのように人につきあっているか（例えば、つきあいのうまさや人気）を他の人としばしば比べる。	.70	.56
sc_b_3	私は、自分と同じような状況にある人がどのように行動するのかをいつも知りたい。	.68	.55
sc_b_4	私は、他の人と比較ばかりするタイプの人間ではない。*	-.64	.51
sc_b_5	私は、何かについてもっと知りたいときには、そのことについて他の人がどのように考えているかを知らうとする。	.51	.39
sc_b_6	私は、今までに成し遂げたことについて他の人と自分自身を比較することがしばしばある。	.66	.52
		説明率 37.93%	$\alpha = .79$

[残余項目：負荷量<.40]

sc_a_1 私は、私の最愛の人（ボーイフレンド、あるいはガールフレンド、家族など）のふるまい方と、他の人たちのふるまい方を比較することがしばしばある。

sc_a_2 私は、お互いの意見や経験について他の人と話すことが好きである。

N = 247

*逆転項目

(a) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

Table 1-b 瘦身理想像内在化尺度の検討―主成分分析と信頼性分析の結果―

		主成分負荷量(a)	相関分析(b)
ide_a_1	痩せている女性は、魅力的である。	.48	.41
ide_a_3	身体が手入れされている女性は、魅力的である。	.68	.57
ide_a_4	細身の女性は、魅力的である。	.71	.66
ide_a_5	体つきが整っている女性は、魅力的である。	.75	.64
ide_b_1	すらっとしている女性は、魅力的である。	.82	.72
ide_b_2	脚が長い女性は、魅力的である。	.81	.68
ide_b_3	曲線美に富む女性は、魅力的である。	.75	.61
ide_b_4	均整がとれている女性は、魅力的である。	.81	.68
		説明率 53.47%	$\alpha = .86$

[残余項目：負荷量<.40]

ide_a_2 長身の女性は、魅力的である。

N = 247

(a) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

性得点を除く 4 得点で正規分布からの有意な逸脱が見られた。しかし、z 値から極端な逸脱はないと判断した。尺度得点を尺度中性点 (2.5) と比較すると、中性点よりも有意に低かったモデルとの比較得点を除き、有意に中性点を上回っていた。

Table 3 には各尺度得点間のピアソン相関値を示すが、すべての組み合わせで有意な正の相関が得られた。

瘦身願望の規定因

瘦身願望の規定因を探るために、重回帰分析を行った。説明変数を社会的比較志向性、瘦身理想像内在化、

同性同輩との比較、女性モデルとの比較の 4 得点とし、瘦身願望得点を従属変数とした。なお、ステップワイズ法を用いた。Table 4 に示すように、瘦身理想像内在化、同性同輩との比較、女性モデルが瘦身願望を有意に規定していた。

さらに、Amos 7.0 を利用して「社会的比較→瘦身願望」に関する因果分析を行った。相関分析や重回帰分析の結果に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式 (最尤推定法：豊田, 1998) の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善

瘦身願望と社会的比較（Ⅰ）

Table 1-c 同性同輩／女性モデルとの比較尺度の検討－主成分分析と信頼性分析の結果－

主成分負荷量 (a) 相関分析 (b)		
[同性同輩との比較]		
bo_sc_a_1	大学で何か集まりや催しがあると、私は、自分の容姿とまわりの「女子学生」の容姿を比べたくなる。	.82 .66
bo_sc_a_2	自分が太り過ぎか痩せ過ぎかを知る最良の方法は、自分の体つきと大学の「女子学生」の体つきを比べることである。	.73 .56
bo_sc_a_3	大学の授業に出席しているときに、自分の装いとまわりの「女子学生」の装いを比べたくなる。	.78 .61
bo_sc_a_4	自分の外見と私のまわりの「女子学生」の外見を比べても、私自身が魅力的かどうかを決めるためには役立たない。＊	-.57 .40
bo_sc_a_5	大学にいと、自分の体型とまわりの「女子学生」の体型を比べたくなる。	.79 .63
		説明率 = 54.96% $\alpha = .79$
[女性モデルとの比較]		
bo_sc_b_1	電車で吊り広告があると、私は、自分の容姿と広告に載っている「女性モデル」の容姿を比べたくなる。	.78 .62
bo_sc_b_2	自分が太り過ぎか痩せ過ぎかを知る最良の方法は、自分の体つきとファッション雑誌に載っている「女性モデル」の体つきを比べることである。	.82 .68
bo_sc_b_3	テレビに「女性モデル」が登場すると、自分の装いと「女性モデル」の装いを比べたくなる。	.84 .69
bo_sc_b_4	自分の外見と「女性モデル」の外見を比べても、私自身が魅力的かどうかを決めるためには役立たない。＊	-.43 .30
bo_sc_b_5	本屋に行くと、自分の体型とファッション雑誌に載っている「女性モデル」の体型を比べたくなる。	.86 .72
		説明率 = 58.10% $\alpha = .81$

N = 247

＊逆転項目

(a) 主成分分析における未回転第Ⅰ主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

Table 1-d 瘦身願望尺度の検討－主成分分析と信頼性分析の結果－

主成分負荷量 (a) 相関分析 (b)		
th_a_1	体重が増えるのが怖い。	.73 .67
th_a_2	もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ。	.90 .87
th_a_3	体重にとらわれている。	.84 .80
th_a_4	何が何でも体重を減らしたい。	.90 .86
th_a_5	もっと痩せていたらと悔やむことが多い。	.85 .81
th_a_6	体力が落ちてとにかく痩せたい。	.74 .68
th_b_1	少しでも早く痩せたい。	.82 .78
th_b_2	痩せられると聞けば何でもする。	.73 .67
th_b_3	自分が痩せることを考えるとわくわくする。	.79 .74
th_b_5	今、痩せることに一番興味がある。	.85 .80
		説明率 = 66.75% $\alpha = .94$
[残余項目（平均値＞3.5）]		
th_b_4	体重を量ったときに減っていると嬉しい。	

N = 247

(a) 主成分分析における未回転第Ⅰ主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

し、最終モデルを得た（Fig. 1）。なお、本分析では、「比較→瘦身理想像内在化→瘦身願望」という構図を用いている。「瘦身理想像内在化→比較→瘦身願望」という因果図式に基づく分析も試みたが適合度が低かった。

Table 2 各尺度得点の検討

	平均値	標準偏差	正規性の検定 (a)		尺度中性点との比較 (b)	
社会的比較志向性	2.91	0.48	$z = 1.12$	$p = .158$	$t = 13.27$	$p = .001$
瘦身理想像内在化	3.58	0.40	$z = 2.77$	$p = .001$	$t = 42.12$	$p = .001$
同輩との比較	2.84	0.60	$z = 2.00$	$p = .001$	$t = 8.84$	$p = .001$
モデルとの比較	2.14	0.67	$z = 1.48$	$p = .023$	$t = -8.56$	$p = .001$
瘦身願望	2.68	0.85	$z = 1.52$	$p = .018$	$t = 3.38$	$p = .001$

 $N = 247$

(a) Kolmogorov-Smirnov 検定

(b) 対応のある t 検定 (対 2.5)

Table 3 各得点間の関係ーピアソン相関値ー

	瘦身理想 像内在化	同輩との 比較	モデルと の比較	瘦身願望
社会的比 較志向性	.29 $p = .001$.53 $p = .001$.21 $p = .001$.25 $p = .001$
瘦身理想 像内在化	****	.42 $p = .001$.32 $p = .001$.44 $p = .001$
同輩との 比較		****	.51 $p = .001$.47 $p = .001$
モデルと の比較			****	.44 $p = .001$

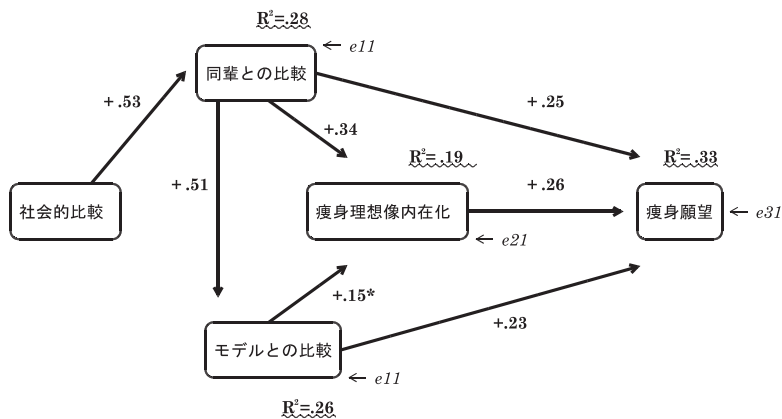
 $N = 247$ **Table 4** 瘦身願望の規定因ー重回帰分析 (ステップ
ワイズ法) の結果ー

同輩との比較	$\beta = .25$	$p = .001$
瘦身理想像内在化	$\beta = .26$	$p = .001$
モデルとの比較	$\beta = .23$	$p = .001$
	$R^2 = .33$	$p = .001$

 $N = 247$ ステップワイズ法：投入基準 $p < .05$ ；除去基準 $p > .10$ β ：標準化偏回帰計数； R^2 ：説明率

従属変数：瘦身願望

説明変数：社会的比較志向性，瘦身理想像内在化，同輩との比較

 $e_{11} \sim e_{31}$ ：誤差項矢印：標準化パス係数 [有意水準：* $p < .05$ ；他はすべて $p < .001$][モデル適合度] $\chi^2_0 = 4.22, p = .239$ ； $GFI = .99, AGFI = .97, RMSEA = .04$ **Fig. 1** 瘦身願望，瘦身理想像内在化，および社会的比較の関連ー観測変数の構造方程式 (Amos 7.0，最尤推定法) による因果分析 ($N = 247$)ー

Ⅳ. 考 察

社会的比較の観点から瘦身願望を扱った本研究では、3つの仮説が検討された。

Festinger (1954) による社会的比較理論に基づき Gibbons & Buunk (1999) が提起した日常的な社会的比較傾向と外見という特定対象に限定した外見比較との関係に関する仮説Ⅰについて、興味深い傾向が認められた。単純相関水準では同性同輩、女性メディアともに日常の社会的志向性による影響を示す有意な正の相関が得られた。共分散構造分析によると、社会的比較志向性は同性同輩との外見比較を直接的に促進するが、女性メディアモデルについては同性同輩との外見比較を媒介した間接的影響が見出された。この結果は、社会的比較が類似した他者を対象として行われることを前提とすると (Festinger, 1954), テレビや雑誌に登場するモデルとの外見比較は実は営まれにくいことになる。したがって、仮説Ⅰは部分的に支持され、比較対象との類似性の観点を導入して修正されるべきである。

仮説Ⅱは、瘦身願望に対する同性同輩や女性モデルとの外見比較におよぼす影響に関わる。ピアソン相関分析や共分散構造分析の結果は仮説Ⅱを支持せず、2種類の外見比較は瘦身願望にほぼ同等の影響をおよぼしていると判断できる。言い変えると、メディアに登場する女性の瘦身性と同等に日常生活で接触する同輩女子学生との外見比較も十分に効果をもっている。しかしながら、次に述べる仮説Ⅲとの関連では、興味深いことに、女性モデルとの外見比較よりも同性同輩との外見比較のほうが、瘦身理想像の内在化を促進している。

瘦身理想像の内在化がもつ仲介的役割に関する仮説Ⅲは、共分散構造分析によると2種類の外見比較ともに支持された。つまり、「2種類の外見比較→瘦身理想像内在化→瘦身願望」という因果的経路が認められた。しかしながら、先述したように、女性モデルとの外見比較よりも、同輩女性との外見比較のほうが、瘦身願望におよぼす瘦身理想像内在化の仲介的役割は相対的に大きいといえる。これも Festinger (1954) が前提とした比較対象との類似性の効果の反映と解釈できる。

本研究では、他者との外見比較 (Thompson *et al.*, 1991) や瘦身理想像内在化 (Stice *et al.*, 1996; Thompson & Stice, 2001) が瘦身願望に果たす役割に関する一定の知見を得ることができた。本研究データを BMI に限定して分析した諸井ら (2011) では、母親の体型の重要性

が見出された。これは、本研究では扱わなかった母親との外見比較の役割を示唆する。また、瘦身願望に対して重要な役割が認められた同性同輩との外見比較にしても、「回答者が通学している大学」の同輩というやや漠然とした比較対象を設定した。日常的に親密な接触を営む親友との外見比較の瘦身願望に対する効果なども吟味すべきであろう。また、Jones (2002) は、7年生と10年生の男女では、身体不満足感にとって、体重の同輩比較が男女ともに重要であるが、同輩との体型比較は女子でのみ重要であった。男子では顔の比較が重要であった。つまり、本研究では、外見比較を一般的に測定したが、身体部位ごとの比較なども検討する必要がある。

また、本研究は瘦身性が美の社会的基準になっていることを前提にし (Thompson *et al.*, 1999), そのことに合致する結果が得られた。しかしながら、例えば Crandall (1988) は、2つの大学寮で瘦身性に関する基準が異なることを認めた。一方の寮の女子大学生の間では平均的体型から逸脱しているほど寮内の人気が高いのに、他方の寮では肥満体型のほうが寮内の人気が高かった。このような社会文化論的視点も踏まえながら、今後も社会的比較の観点から瘦身願望の規定因を明らかにすべきである。

〈付記〉

- (1) 本研究は、守安可奈 (生活科学研究科・生活デザイン専攻1年)・前原 澄・松谷歩美 (生活科学部人間生活学科 2010 年度卒業) が諸井克英の下で卒業研究として取り組んだ『瘦身願望と社会的比較』に関する研究の一環として収集したデータに基づいている。
- (2) 本研究の事前準備にあたって、2009 年度同志社女子大学研究奨励金 (諸井克英:「女子青年の摂食障害傾向におよぼす瘦身モデルの影響に関する社会心理学研究」) を利用した。
- (3) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 19.0.0.1 for Windows および Amos 7.0 利用した。
- (4) 本研究に含まれている Body Mass Index に関する分析は、別に発表した (諸井ら, 2011)。

V. 引用文献

- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究 48(3), 267-274.
- Crandall, C. S. 1988 Social contagion of binge eating. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 588-598.

- Dittmar, H. and Howard, S. 2004 Thin-ideal internalization and social comparison tendency as moderators of media models' impact on women's body-focused anxiety. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 768-791.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gibbons, F. X., and Buunk, B. P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- Groesz, L. M., Levine, M. P., and Murnen, S. K. 2001 The effect of experimental presentation of thin media images on body satisfaction: A meta-analytic review. *International Journal of Eating Disorder*, **31**, 1-16.
- Jones, D. C. 2002 Social comparison and body image: Attractiveness comparisons to models and peers among adolescent girls and boys. *Sex Roles*, **45**, 645-664.
- 諸井克英・小切間美保 2008 女子青年におけるダイエット行動におよぼす瘦身モデルの影響 総合文化研究所紀要(同志社女子大学) **25**, 58-67.
- 諸井克英・小切間美保・前原 澄・松谷歩美・守安可奈 2011 親子間における体型指数の関係-女子大学生の場合- 総合文化研究所紀要(同志社女子大学) **28**, 130-134.
- Stice, E., Ziemba, C., Margolis, J., and Flick, P. 1996 The dual pathway model difference bulimics, subclinical bulimics, and controls: Testing the continuity hypothesis. *Behavior Therapy*, **27**, 531-549.
- Thompson, J. K., Heinberg, L. J., and Tantleff, S. 1991 The Psysical Comparison Scale. *The Behavior Therapist*, **14**, 174.
- Thompson, J. K., and Stice, E. 2001 Thin-ideal internalization: Mounting evidence for a new risk factor for body-image disturbance and eating pathology, *Current Directions in Psychological Science*, **10**, 181-183.
- Thompson, J. K., Heinberg, L. J., Altabe, M., & Tantleff-Dunn, S. 1999 *Exacting beauty: Theory, assessment, and treatment of body image disturbance*. American Psychological Association.

(2011 年 11 月 9 日受理)